

ファン文化と韓流

森 雅雄

1

もう数年前の話になってしまったが、この国で一本の韓国ドラマが大流行したことがあった。これに端を発した一連の事態を「韓流」と称する風習も生まれて、この言葉だけは今でも残っている。これに耽溺したのは中高年の専業主婦であると言われたが、実際は未婚者にも職業婦人にも、そしてマスコミ関係者にも知識人にもファンはいた。それはかつて、それまでマンガに接したことの無い人が「ねじ式」に触れてこれを賞賛したことにくらか似ていたかも知れない。

このドラマがファンの琴線に触れた理由を詮索する語りも地に満ち、その行動についても彼らの痴態（とされるもの）を諷する者とそれがもたらす（とされる）韓国理解を評価する者とが並立していた。しかし、他人の琴線などは（たとえ存在するにしても）経験することなどできぬものであり、痴態を諷することも韓国理解（それが何であれ）を評価することも詰まるところはそうする者の先験的な判断にしか過ぎない。筆者はア priori に興味はない。筆者が関心を持っているのは形而下の世界であり、ここで言うのは、このドラマ・ファンの行動の真面目と韓流と呼ばれたものが何であったのかを測定することである。

2

まず『冬のソナタ』というドラマ自体についても、韓国の文化や社会や歴史が描かれておらず、或いは性愛について言及されていないという指摘がある。例えば、四方田犬彦はこのドラマを評して、「人物たちは民族を語ることもなければ、伝統儀礼に参加することもない」〔四方田 2005:208〕、「彼らはけっして歴史的変動に眼差しを向けるわけでもなく、あたかも韓国が悠久不変の社会であるかのように振舞っている」〔四方田 2005:213〕、また「欲望と性交が語られることはない」〔四方田 2005:212〕と述べている。

この指摘は殆ど正しい。ドラマの冒頭シーンからして既にそうなのであるが、カメラは、高校に遅れそうなヒロインが駆けてくる春川の古い瓦屋根の家並みは写しだすけれども、同じ街区（昭陽路2街）が舞台となっている『初恋』がそうするように¹、その門扉の内側に入り込んで中庭や家屋の中で喜怒哀楽する庶民の生活を写しだすことはついにない。

監督のユン・ソクホがこのシーンを撮影するためにこの昭陽路2街を選んだのは要するに「ここが一番春川の雰囲気が出ている所」〔山崎・青木 2004:54〕だからであるが、その雰囲気は、ここが高層化されてその西側に隣接する米軍キャンプが覗かれることを惧れたアメリカの意向によって残され

たものであること〔康 2004:82-83〕に、その視線が及ぶこともない。

このキャンプ・ベイジに進出しているのは、米陸軍第2歩兵師団第2航空連隊の第1大隊で、配備されているのはAH-64Dアパッチ攻撃ヘリコプターである。主要兵装のAGM-114A ヘルファイアはあらゆるMBT（主力戦闘戦車）の装甲を破壊することが可能であるとされ、アパッチはこれを最大16発搭載することができる。春川はDMZ（非武装地帯）を去ること50km。仮に朝鮮人民軍の機甲部隊がDMZを突破し時速50kmで南下して来たとするれば、1時間で到達できる位置にあるわけである²。朝鮮戦争の時も春川は主要な攻撃目標の一つとなった。当初、朝鮮人民軍の進撃を阻止したのはここを守っていた第6師団だけで、第6師団は後に「春川の岩」と呼ばれることになる。また、このキャンプにはアメリカの戦術核兵器が配備されていたという話もある。

この街区の辺りは米兵相手の娼婦が住んでいた街でもあるが、このドラマはそういう気配を見せることもない。『初恋』では、娼婦こそ登場しないものの、米軍から流れてくる物資を闇で商う女性は登場しているのに、である。

ドラマではキャンプの長く続く壁も写しだされるけれども（第2話）、これもヒロインと敵役の間を隔てる心の壁を暗示するモンタージュ表現としての意味はあっても、この壁が春川駅と市の中心部との交通を遮断していることを風刺する意図は微塵もない。

このように確かに四方田の指摘はその通りであるけれども、しかし、細部に目を凝らして見るならば、必ずしもそうとは言い切れぬものがそこに宿り給うていることに気づかされる。そして、この細部に目を凝らす者こそがファンと呼ばれる人々なのである。

例えば、このドラマのヒーローが1973年2月18日生まれであるということは、ファンの間では殆ど常識のことに属するが、それはドラマの小道具としてほんの一瞬映しだされる彼の「生活記録簿」の読みとりによっている（第12話）〔「冬のソナタ」の謎解明委員会 2004:180〕。短い映像なので普通の視聴者ならば目に留めることはないものであるが、ファンなればこそ「研ぎ澄まされた？ 動体視力で目を皿のようにして凝視」し、その母親のミヒの生年月日も1951年7月18日であると判読するのである³。四方田もこの点では普通の視聴者の一人に過ぎず、「冗談半分に登場人物の年表を作ってみ」〔四方田 2005:212〕ることしかせずに、彼女の生年を1945年前後と誤ってしまう。

ミヒの生年月日がそうであるならば、彼女はその息子を満21歳と7ヶ月で生んだことになる。これは1世代前の話にしても、いささか早めの気味は否めないのであるが、しかし、韓国社会の動向を反映するところもあるのではないかと思う。

平均初婚年齢は韓国の場合でも着実に右肩上がりの軌跡を描いているのであるが、1980年から82年にかけて一時的に下降したことがあった。女子で言えば、24.2歳くらいから23.8歳くらいに下がったのである〔鈴木 2005〕。これを算ずれば彼女たちは1957年前後の生まれということになる。すなわち「475世代」（40歳代後半以後、1970年代に大学に通い、1950年代生まれの世代）である。概ねベビーブーマーに重なる。付け加えるならば、ユン・ソクホもこの年の生まれである。

同様の現象は日本でも見られて、女子の場合、1965～67年の24.5歳から1970～72年の24.2歳と一時的に初婚年齢は下降していて⁴、これも団塊の世代と言われるベビーブーマー世代にかかわっている。彼らが人生を生き急いだ理由は数の多さによる競争ということもあったかも知れないけれども、

もう一つには彼らが価値観の変動期にあって新旧二つのそれを宿していたという事情もあったように思う。日本のベビーブーマーたちは古い価値観に対して概して挑戦的で、例えば同棲などは一種の流行にもなったけれども、その半身では古い価値観も憶えていて卒業とともに結婚して帳尻を合わせていったのである⁵。

同様の状況は韓国にもあったのだらうと思われる。韓国のカウンターパートもまた、政治的にも文化的にも上の世代に対立し反抗した世代である。そして、察するにそういう彼らもまた古い価値観のいくばくかをその身体に留めていたのだらう。婚約者が他の女と結婚した衝撃から自殺を図り、友人に助けられ、その友人と成り行きの関係をもって子供を孕み、その子供を宿したまま彼の前から姿を消すというミヒの生き方は、今日から見ても十分に先鋭的と言えるだらう。しかし、彼女の行動の底には結婚への執着があり、昔の婚約者を30年近くも忘れずに拘泥する点では古めかしいのである。

このドラマは1973年生まれヒーローたちの世代の物語のように見えるけれども、彼らが右往左往する顛末は詰まるところミヒとその仲間たちの愛憎劇の後日談に過ぎず、このドラマの本当の主人公はミヒたちというべきである。ならば、このドラマはその根本のところ韓国当時の社会が投影され、「欲望と性交」も語られていると言うことができるのである。

社会の投影についてはもう一つ例を挙げる。先に参照したファンの有志が作った本では、ヒロインの父親が死んだのが16年前という台詞もちゃんと拾い上げている（第11話）〔「冬のソナタ」の謎解明委員会 2004:174〕⁶。ファンの聲みに倣って細部を少しく詮索すれば、命日は11月か12月であるから（第1話）⁷、命日を迎えたのは年が明ける前で、即ち2001年のことであり⁸、従って逆算すれば、父親が亡くなったのは1985年ということになる。このことは一つの小さな謎を解くヒントになる。

敵役やその同僚のDJがヒロインに贈る「スマイル」という曲は（第3話、第9話）、1985年の趙東振のフォークソングであるということもファンの本には書かれていることである〔「冬のソナタ」の謎解明委員会 2004:96〕。ただ、2001年の時点で、しかも結婚前の娘に贈るにはいささか古風の趣があるし、また不治の病で死んでいく少女を歌ったその歌詞が、婚約者に贈る歌としてはいささか穏当を欠くのではないかという点でも不審である。しかし、父親が亡くなったのは1985年であることを考えれば、その意味は変わってくる。父親はミヒの同級生であるから、34歳で亡くなったことになる。悪性の病であった可能性は十分に考えられる。また、趙東振が歌手活動を開始したのは1968年。同じ年にツインフォリオが結成。少し遅れて韓大洙や金敏基が登場し、韓国の60年代70年代の交はフォークソングの出現期だった。それは演歌が主流だった韓国の歌謡界に吹いた新しい風であり、また若者が担った対抗文化でもあった。即ち、このドラマの本当の主人公たちはこのフォークソング世代であったということになる。それ故に、夫の死とちょうど同時に、同じように不治の病の少女を歌った曲を、そして自分たちの青春時代に馴染んだフォークソングを、残された妻がその夫の死に重ねたということは十分に考えられる。そして、ヒロインはその母親の好む歌を聞いて育ったのだと解くことができるのである。

ファンの細部への凝視に戻って、更にその例を引く。第3話の、ヒロインが自分のオフィスを出て、バスに乗り、ヒーローのオフィスに着くまでのシーケンスはいくつかのカットに分かれているが、ファンは、それぞれのカットでヒロインが抱える封筒の色やその順序、フラップの開閉状況、青焼き

の巻き方を注視して、それがカット毎に異なることを検証している。また、ヒロインの指輪がカット毎になかったり、右手にしていたり、左手にはめていたりすることを、「16分の1コマ送りとフレーム単位で検証」している。ただし、ファンはこれで、嫌韓流の諸氏の如くに鬼の首をとったように振る舞うわけではない。ただこれを楽しむのであり、その態度は真に「冷めた皮相的消費」〔岩淵 2001:196〕というに相応しい。筆者は「16分の1コマ送りとフレーム単位で検証」の正確な意味を理解していないが、それでもこのファンの言うことは間違っていないだろうとは思ふ。Un fan terrible!

この、ファンが持っている積極果敢で、作品のあら探しをし、韓臭を抜いているものに韓国を嗅ぎ取るが如き、制作者の意図に背く行動様式を表現するに、毛利嘉孝は「ファン文化」、四方田は「文化的ポーチング（密漁行為）」という言葉を用いている〔毛利 2004:17、四方田 2005:220〕。毛利は「ファン文化」として、反復的な視聴、インターテキスト性⁹、メディア・テクノロジーの使いこなしという3点を挙げている。

インターテキスト性について敷衍すれば、これは「雑誌の韓国ドラマの情報やインターネットのホームページ、メール・マガジンなどドラマ以外のさまざまな情報と交錯することで」〔毛利 2004:31〕あり、ファンはここでドラマと「近接した物語」である「役者のエピソード」や「ドラマのコードを形成している韓国の文化や歴史を自分で収集し、編集し、再構成しながら楽しんでいる」という〔毛利 2004:32〕。ファンが、まず「役者のエピソード」に関心をもつのはその通りであろう。しかし、「韓国の文化や歴史」については、そのドラマに「近接」する限りでの文化や歴史であることに留意する必要がある。ここで具体的に挙げられているのも、「ご飯茶碗を持たずに置いて食べたり、女性が膝を立てて食べるのが正式な食べ方であることを知って面白かった」とか「敬称のつけ方がドラマの進行の中で微妙に違うのを発見して興味を覚えた」〔毛利 2004:31〕というアドホックで断片的なものでしかなく、食文化の体系的理解や社会言語学的分析に及ぶ気配は毫もない。四方田が挙げる例も「ドラマに縁のある場所を巡礼地のように廻る韓国旅行」や「韓国語や韓国料理を学んだり」することである〔四方田 2005:219〕。ハリウッドのフィルムを見て英語学習の志を抱いたという挿話ならばむしろ陳腐に属することであろう。

毛利は、ファンたちが「発見し、再構成し、消費している」ものを、大塚英志がアニメファンの言葉を借りて言う「世界観」に対応させ、「それは、韓国という国家、文化、そして人びとが交錯する場が作り出している『物語性』であり、それは矛盾や複雑さ、抗争をはらんでいる」ものと述べているが〔毛利 2004:32〕、殆ど感傷にしか聞こえない。韓国の国家や文化、人々が矛盾や複雑さ、抗争をはらんでいることはその通りであろう。しかし、それがファンの発見したり再構成したりする物語とどう関係しているというのだろうか。先ほど参照したファンが作った本の「スマイル」についての記述でも、『初恋』では下敷きにされていた演歌とフォークソングやヘウニの歌との対比や、時の政権との「抗争」などへの言及はいささかもないのである。

このことは一人のファンの行動記録——ファンの書いた本の中には巧まずしてファンのエスノグラフィになっているものがある——によっても確認できる。向山昌子は2003年4月のNHK衛星放送での放映から『冬のソナタ』を視聴したファンである（彼らをファンの間では第1世代と呼ぶ）。隙だらけのドラマにつっこみを入れながらの視聴で、これは先のファンの例と同様である。その頃はま

だ本屋へ行ってもめばしい雑誌はなく、わずかに NHK の番組情報誌が頼りで、「とにかく、生の情報がほしかった」〔向山 2004:23〕というその情報は疑いもなく「役者のエピソード」などの情報に違いない。韓国テレビ局サイトやファンサイトへのアクセス、海外通販でのマレーシア製 DVD や OST、韓国の雑誌、グッズ、中国や香港で作られた写真集、海外のファンサイトが独自に編集したファンブックなどの購入。そして、これらの際の無料翻訳サイトの利用、ブロードバンド配信による視聴、実況中継のカキコなど、メディア・テクノロジーの使いこなしも顕著である。ドラマの撮影地にも行き、主演男優と会う（というのはファンの間での言い方で、ノーマルな日本語では見る、という）。「対話」ツアーにも参加する。しかし、そこを出ることはない。

ソウルの中央高等学校を訪れるファンが、最寄り駅からの道の脇にある独立運動記念地の碑に目を止めることは殆どないだろうし、「ニムの沈黙」の詩人や中央高等学校との縁に関心を寄せる気配もない。春川の衣岩湖畔に立つファンが、その人工の湖を作った資金の由来について忖度することはないし、あり得たかも知れないその別の使い道に思慮が及ぶことは更でないだろう。

ファンの真面目が、ドラマとそれに「近接した」領域への偏愛、映像の微細な検証と情報の徹底した収集にあることは間違いない。少なくともファンは「動体視力」の限りを尽くし、「16 分の 1 コマ送りとフレーム単位で検証」するような忍耐を韓国の統計資料や韓国現代史に向けることはない。研究者はこの逆である。例えば、四方田はミヒたちの人生を理解しようとしてこれを韓国現代史に重ねる〔四方田 2005:212〕。しかし、既に述べたように、彼はミヒの生年を誤っているのだから、誤った前提のもとにこの作業を行っているのである。逆に、ファンはミヒの生年を誤ることはないが、これを韓国現代史に重ねることはしないのである。

恐るべきファンの映像チェックの例をもう一つ引く。手込めにしようとした敵役の手から逃れてソウルの巷で道を失ったヒロインが、携帯電話でヒーローに助けを求めると、ヒーローは 200km 彼方から車を飛ばし、トマホークばりの正確さで彼女にヒットするという挿話がある（第 8 話）¹⁰。隙だらけのこのドラマの中でもあり得ないことでは一、二を争う話としてファンの間ではつとに知られた話であり、韓国の携帯電話には GPS 機能が搭載されているのだとか、携帯電話でやり取りをしながら探し出したのだとか〔「冬のソナタ」の謎解明委員会 2004:155〕、先ほどのファンサイトに登場するあるファンはこれを愛のせいだとか言って（これは規約において正しい。なぜならこのような奇跡を愛と定義するからである）、百家争鳴である。

しかし、驚くべし、筆者は、あるファンがあるサイトで、この場所は、10 年前の春川で酔っぱらいに絡まれたヒロインをヒーローが助けたとき、彼が受けた傷に彼女が薬を塗ってあげた場所（第 1 話）と同じだからこそ彼にはその場所が分かったのだと解いているのを見かけたことがあるのである。彼女の行方が分からない、暫し考えた後に、ああそうだ、あの時のあの場所にいるに違いないと思いついて駆けつけてみると、果たして彼女はそこに佇んでいた、というのは陳腐な物語のモチーフとして存在している。しかし、それは物語上の場所が同じということなのであって、撮影場所が同じということではない。撮影の場所と物語の場所は異なる階梯に属しており、これを混同してはそもそも物語が成立しない。このように解いた彼女は、もちろん銀幕上の列車を見て逃げ出した時代の初な視聴者ではなく、映像の文法などはどうの昔にその身体で憶えてしまっている視聴者なのだから、この混同

は意図的な混同であり、つまり意図的に混同するという新しいゲームを始めているのである¹¹。重ねて言うが、ファンの関心はあくまでもドラマとその周辺を徘徊するのであって、そこを知悉し尽くしてネタがなくなっても、そこを離れて韓国という文脈に足を踏み入れるよりは、階梯の混同をするという新しいゲームを作り出してもその周辺に留まるのである。研究者たちは（ポストモダンの信奉者でもない限り）そういうことはない¹²。

しかし、それを可能にするためには、この二つのシーンが同じ場所で撮られたことを見抜く眼力が必要ではない。驚くのはやはりそのことである。第1話と第8話とでは日本の放映では2ヶ月ほどの間隔があり、それを埋めるためにはビデオの反復視聴を要したであろうが、そのことには驚かないにしても、人物の背景に僅かに写る、しかも夜景のその同一に気づく集中度には驚嘆するほかはないのである。

実は撮影場所はソウルでも春川でもなく水原のナヘソク通りであるという〔山崎・青島 2004:222〕。通りの名称は、水原出身で朝鮮初の女流洋画家、女流作家にして、先駆的なフェミニストの名前に因んでいる。女性学の研究者ならば必ずや関心を寄せるに違いない、羅蕙錫とその悲劇的な人生に、このドラマのファンが目を向けることは殆どない。逆に四方田は、この撮影場所が、自らが産婆役となってこの世に出した本〔羅 003〕に縁があることを知らないだろう。

3

次に、これらファン文化の総和であるところの「韓流」について検討する。

まず、「韓流」そのものがない、日韓友情年を控えてこれを演出したいセクターによって作られたブームに過ぎないとする、ネット界を中心に伏流する説がある。そこで、「韓流」の始まりとされるドラマ放送の切っ掛けから見てみる。

NHK関係者の証言によれば¹³、2001～2002年当時のNHK海外ドラマ部門にはヒット作がなく、アジアにも選択肢を広げようということになった。人気だった『ビバリーヒルズ高校白書／青春白書』のアンコール放送が終了するのは2002年である。韓国・台湾・中国などの作品を集めることになり、視聴者からの韓国ドラマが面白いというメールや手紙もあった¹⁴。即ち、これ以前に韓国ドラマのファンはいたということになる。そこに韓国のKBS放送から『冬のソナタ』の力の入った売り込みがあった。女性ディレクターがこれにハマって推薦したけれども、幹部、男性プロデューサーたちはヒットを予想できず、このメロドラマを理解しなかったという。これらから、韓国の国策は別にして、日本の「韓流」が作為によって作られた様子を窺うことはできない¹⁵。

ではそれを受信した第1世代のファンはどうだったのか。再び向山の例を参照すれば、第1に、「友人からの電話がきっかけだった」〔向山 2004:12〕（ファンの用語ではこのような誘いのことを「布教活動」という）。第2に、彼女は「もともと海外ドラマが好きだった」〔向山 2004:13〕。なお、彼女に布教した友人は海外ドラマを観て語り合う友人でもあった。

この第1のことから、NHKで最初の放送がされる以前にこのドラマを見ている、いわば第0世代のファンがいたということが確認できる。向山に布教した彼女が何者なのかは分からない。しかし、向山はその友人とは別に、明らかに田代親世と分かる人についても述べている〔向山 2004:144〕の

で、彼女の経歴をしてみることにしよう¹⁶。

現在、韓国エンターテインメントの案内者として知られる田代は、学生時代に偶々ソビエト映画を見たのがきっかけでアジア映画を見るようになる。中国の『芙蓉鎮』(1988)や韓国の『シバジ』(1989)、『キルソドム』(1987)といったフィルムである。1989年に大学を卒業して岩手放送のアナウンサーとなった後は、休日に上京して映画祭に足を運んで、香港映画にハマり、周潤發にのめり込む。1994年フリーとなって東京に戻り、1997年6月から1999年1月まで香港中文大学に留学する。留学の少し前には、香港映画を見るために衛星放送のスタープラスに加入している。

「韓流」の以前には、香港に出張って、出待ち、入待ちは当たり前、同人誌や情報誌を作り、果ては配給会社から字幕チェックを依頼されるほどの香港芸能ファンがいた。これらミーハー濃度の高い香港ファンが日本に発生したのは1980年代の後半。『男たちの挽歌』(1986、日本公開は1987)の周潤發がきっかけだったらしい〔原 1996:79-81〕。90年代には世間の知るところにもなって報道もされた¹⁷。田代はその遅めのファンということになる。

留学中の田代はスタープラスのアルバイトで韓国ドラマのプロモーション・フィルムのナレーションを担当し、韓国ドラマをきちんと見ることを決意する。帰国後、スタープラスで見た『星に願いを』(1997)で韓国ドラマにハマる。『星に願いを』は奇しくも、中華圏で「韓流」という言葉を生むきっかけとなったドラマである。『冬ソナ』同様、『キャンディ・キャンディ』の影響を受けているとも言われている。

香港映画ファンの原智子の場合も、香港にやってくる韓国人ファンとの遭遇がきっかけで韓国に興味を持つようになった〔原 1996:73-76,135〕¹⁸。韓国では、80年代半ばに、日本よりも強い香港芸能ブームがあったのである。その端緒はやはり『男たちの挽歌』だったらしい〔原 1996:139〕。香港スターのファンには30代の女性が多い〔原 1996:84〕らしいのだが、「冬ソナ現象」を作った女たちは30代後半から50代前半くらいが最も多いという〔向山 2004:8〕。もしそうならば、この間10年の経過を算入すれば、この二つのファンは世代的に重なることになる。「香港映画を中心とするアジアン・エンターテインメントを紹介してきたある雑誌の編集長」の「ここ数年、香港映画の衰退とともに読者はそのまま韓流に移行した」という証言もある〔向山 2004:144〕。田代の経歴は、最初は香港に興味がかいそれが韓国に移っていった流れの一例ということになる。

田代は韓国専門のチャンネル(KNTV)にも加入し、自ら録画したビデオを持参して知り合いの放送関係者に見せて回る。同世代の女性局員は大いに楽しんでこれを認めたが、上司の男性は受け入れなかったという。彼女の布教活動がNHKに及んだかどうかは分からないけれども、女性局員と男性上司との対応の落差はNHKでの状況と同様である。

このように見てくれば、「韓流」は無から有が生じるような新しい現象ではなく、香港ブームの第二幕ないし一変種であるように見えるのである。

このようなことは第2の点からも窺うことができる。アメリカン・ドラマは1950年代から日本でも放映されていたけれども、70年代80年代に輸入量が落ち込んだ後、90年代に再び活況を呈した時の視聴者は既に万事に積極果敢に振る舞う「ファン文化」を身につけていた。ビデオは普及し尽くして録画再生、反復視聴は普通のことになっていた。ドラマ関連情報の要望に応えるべく関連の書籍や雑

誌が出版され、インターテキスト性も実現していた。殊に人気のあった『ピバリーヒルズ高校白書／青春白書』についてはその需要が多く、数々のピバヒル本が出版され、雑誌でも特集された。ファンはこれで主演女優のゴシップを知り、アメリカの文化、例えばプロムが何であるかを学んだのである。ファンミが催され、ドラマ・ロケ地への訪問は冬ソナ・ツアーの前はピバヒル・ツアーが定番だった。細眉やキャミソール・ワンピなどのモードは日本で流行となる前にドラマで知られた。ファッションが話題になった点では『冬ソナ』に似ている。アメリカ社会の問題もここから学ばれ、この点では『冬ソナ』よりも上を行く。メディア・テクノロジーについては、明らかに10年の差があり、ピバヒル・ファンは、せいぜい電子メールを利用して在米の友人に最新回の粗筋を尋ねることくらいしかできなかつたのはやむを得ないことである。ただ、この遅れを取り戻すかのように、放送がとうに終わった今日、ピバヒルのファンサイトが盛況で、そのファンの熱情には驚く。

このように、ドラマ・ファンの観点から見れば、「韓流」はドラマ・ブームの一部と言えるのである¹⁹。

4

以上を要するに、第1に、韓国ドラマについての「ファン文化」の真面目はドラマとその周辺への詮索にあるのであり、韓国一般への関心にあるのではない。

第2に、「韓流」は、香港映画やアメリカン・ドラマへの趣向とも連続しているものであり、これと明瞭な境界を持って区切られるものではない²⁰。

香港芸能ファンと韓流ファンが重なり、この二つが連続しているということは、逆に、韓流ファンの多様性をも意味している。香港ブームと韓流の連続を担っているのは全ての韓流ファンではなく、主に40代の女性だからである。また、毛利も韓国文化への関心度について、20代、30代は韓国文化一般に興味がある人が殆どであり、50代、60代は『冬ソナ』に特別な関心を寄せている者が多いと述べていて〔毛利 2004:25〕、韓流ファンが一様でないことを示している。更にこれは、韓流が韓国理解に貢献するという見方に関しても（仮に貢献するとしても）、「韓流」の全てについての命題ではなく、20代、30代について妥当するかも知れない命題ということになる²¹。「韓流」という集合の全ての要素に必要にして充分な基準は「韓流」という名称の他にはないのである。

ところで、「韓流」が政府や広告代理店やNHKによって作られたのではないのだとしても、他の誰か（たち）が、他のやり方で作ったとは言えるかも知れない。例えば、揶揄したり、希望したりする者は、そうすることで、その都度、「韓流」というカテゴリーを制作しているのである。「韓流」をワイドショーなどで話題にするセクターも同様である（これは「韓流」ドラマを放送してその視聴率の動きに利害を有するセクターでもある）。揶揄する者と希望する者と話題にする者はその性格も底意も異なる。韓流ファンが多様であるように、これを制作する者も多様なのである。ただし、揶揄する者も希望する者も話題にする者も、そうすることで逆に、「韓流」とそのファンたちが持っている、香港映画趣味の延長であつたりなかつたり、韓国文化への関心が強かつたり弱かつたりするというような多様性を均質化しているのであるが。

【注】

1. このドラマのヒロインが駆けてくる道は、『初恋』の主人公が住む家のすぐ近くにある。ヒーローの家に至っては、細い路地を挟んだだけの隣家であって、『初恋』の中でもしばしば映り込んでいる。
2. (1) 朝鮮人民軍が保有するM B Tの数は韓国国軍のそれを凌駕している。ただし、その主力は旧式のもので、T34は第2次大戦でティガーを相手に戦果を上げ朝鮮戦争でも破竹の南進に貢献したけれども、これが未だ現役であり、若干保有している北朝鮮では一番新しいT72も湾岸戦争では第3世代のM1エイブラムの敵ではなかったものである。これに対して韓国が保有する戦車はそのほぼ半数が近代的なK1となっている。(2) アパッチの目標は戦車のほか、東海岸を上陸する兵力も想定されている。朝鮮戦争の時は、ゲリラ部隊が三陟、玉溪、臨津津港、江陵付近に上陸している。(3)2005年3月29日、米軍のトランスフォーメーションに伴ってアパッチ部隊は春川から撤退し、キャンプ・ベジは返還された。国際競争入札による再開発が報じられたが、土壌汚染が発覚したせいであろうか、開発は未だ始まっていないようである。
3. 『『冬のソナタ』“ツッコミ”鑑賞記』と題するファンサイト (http://www.k.k.ijj4u.or.jp/~hit_me/hitomi/huyu.htm) による。
4. 厚生労働省『人口動態統計』による。
5. 林香里が引く2003年の「日本人の意識」調査(NHK放送文化研究所)によれば、婚前交渉を是と答えた人の割合は、45～49歳から50～54歳のところで急激に低下している〔林 2005:119〕。
6. 第6話には父親が亡くなって15年以上もたつという台詞があるから、第6話と第11話の間に命日があったことになる。
7. 第1話にヒロインが父親のチェサ(法事)に出る場面がある。即ち、細かく見れば、「伝統儀礼に参加」している場面もあるのである。
8. 最終回(第20話)で、ヒロインが韓国を立とうとする場面に映しだされるチケットの日付から、この日は2002年3月20日ということが分かる、とファンの本にはある〔『冬のソナタ』の謎解明委員会 2004:232〕。
9. 最初の2点については、林の報告にもある〔林 2005:88,86〕。
10. このモチーフと同じものが、日本のマンガの『キャンディ・キャンディ』にある(ニールに連れ込まれて、逃げだしたところ、場所が分からなくなり、アルバートが見つけてくれる)。モチーフの類似はこれに限らず、事故死したアンソニーに似たテリーヌスが登場したり、その母は舞台女優で父とは結婚していなかったり、記憶喪失のアルバートが交通事故で記憶が戻ったり、テリーをかばってスザナが怪我をし、テリーはキャンディを愛しながらもスザナを選んだりするなど、多くのかかなり細かい類似がある。アニメ版が韓国で放送されたこともあって、このドラマがこのマンガの影響下にあることを窺わせる。転校生が登場したり、ヒロインが最初はあか抜けなく作られるのも学園ものマンガの定番である。日本の少女マンガがその原型を完成させたのは1960年代の前半で、その中身は「母もの」であった〔石子 1975:116-121〕。日本のマンガは1960年代から翻案翻訳されて韓国に入っていた〔四方田 2005:209〕から、「母もの」も入っていたはず

で、これもこのドラマに養分を供給しているのかも知れない。

11. ヒロインの家（として撮影された家）はソウルにある。それ故、ここから春川の高校に通う彼女は度々遅刻するのである、という絵解きも階梯を混同させたゲームの一例である。
12. 岩淵功一はファンの「冷めた皮相的消費」を「ポストモダン的な商品消費」、即ち、商品がその「本来」の意味、機能、文脈から切り離されて、様々なイメージが再生産され新たな記号的意味が付与されながら消費されることに合致すると述べている〔岩淵 2001:196〕。
13. 小倉・小針編 2007:78、及び、「NHKが『冬ソナ』放送に至るまで…「韓流」は必然にして偶然だった」『朝鮮日報』（電子版）2005年12月11日入力、「対談 私たちが冬ソナにハマる理由」『韓国ドラマ・ガイド 冬のソナタ』（第10刷）日本放送出版協会、2004年による。
14. 『冬ソナ』を担当することになる女性ディレクターは、「NHKの番組情報誌」『ステラ』の臨時増刊5月11日号で、「これからは、アジア系の作品もやりたいと思います。〔……〕メールなどで『面白い番組がある』という情報をいただけるとありがたいですね」と書いている（『海外ドラマ FUN BOOK-2』2002年、136頁）。
15. ただし、そのクレジットの頭がヒロインを演じた女優に変更されているのには、『アリー・myラブ』を継承させて、キャリア・ウーマンを主人公とする現代的な女性の生き方を描いた物語としたいというNHKの作為があるだろう。
16. 山村基毅「韓国エンタメ・ナビゲーター 田代親世に聞く」（2005）（http://www.nikkeibp.co.jp/lc/jidai/050915_tashiro1/index.html）による。
17. 例えば、1994年7月7日付『日本経済新聞』には「香港・台湾スター追っかけます!」、1995年10月21日付同紙には「熱烈ファン、香港追っかけ」という記事がある。
18. 日韓共同制作ドラマの『フレンズ』（2002）で日本人の女が韓国人の男と出会う場として設定されているのも香港である。このような状況をふまえたものと思われる。このドラマに関しては、ワールドカップの日韓共同開催を契機にした日韓友情の演出であると言える。これが韓国理解や日韓友好に寄与することを懐疑する見方については、野平・大北 2004 参照。
19. 毛利は、『冬ソナ』ファンもかつて SMAP に夢中になったり、エルビス・プレスリーやジェームズ・ディーン、クイーンなどのロック・バンド、ブラジル音楽などを趣味としていた人も少なく、これまでも一定の文化実践を積極的に行っていた人だったと述べている〔毛利 2004:29〕。「韓流」はこのような文化実践の延長線上にあるとも言える。
20. 逆に、ファンの側から言えば、周潤發もジェイソン・プリーストリーもペ・ヨンジュンも、好みの対象という点では、論理的には等価である。
21. 更に、彼女たちは「韓流」の前から香港に関心があったのだとすれば、彼女たちはこのドラマによって韓国への関心が高まったというよりは、元々アジア方面に関心を持っていたとも言えるのである。

【参照文献】

- 石子順造 1975 『戦後マンガ史ノート』 紀伊国屋書店。
- 岩淵功一 2001 『トランスナショナル・ジャパン』 岩波書店。
- 小倉紀蔵・小針進編 2007 『韓流ハンドブック』 新書館。
- 康熙奉 2004 『「冬の恋歌」を探して 韓国紀行』 TOKIMEKI パブリッシング。
- 鈴木 透 2005 「韓国の極低出生力」(第57回日本人口学会レジュメ)。
- 羅 英均 2003 『日帝時代、わが家は』 みすず書房。
- 野平俊水・大北章二 2004 『韓国のなかのトンデモ日本人』 双葉社。
- 林 香里 2005 『「冬ソナ」にハマった私たち——純愛、涙、マスコミ……そして韓国』 文藝春秋。
- 「冬のソナタ」の謎解明委員会 2004 『冬ソナの謎』 幻冬舎。
- 向山昌子 2004 『微笑みの貴公子～ホテリアー、冬のソナタに恋をして～』 竹書房。
- 毛利嘉孝 2004 『「冬のソナタ」と能動的ファンの文化実践』 毛利嘉孝編 『日式韓流——「冬のソナタ」と日韓大衆文化の現在』 せりか書房。
- 山崎裕子・青島昌子 2004 『冬のソナタ ロケ地追っかけ珍道中』 TOKIMEKI パブリッシング。
- 四方田犬彦 2005 「『ヨン様』とは何か——『冬のソナタ』覚書』 『新潮』 7月号。

Fan Culture and Korea Cool

Masao Mori

Abstract

Several years ago a Korean TV drama, *Winter Sonata* was very popular among the Japanese people and the reason was also argued eagerly why the fans were so crazy about it. This essay aims not to clarify fans' inner feelings, but to examine the feature of their behavior called fan culture and the source of this boom.

First, we conclude that the principal feature of fans' behavior is limitation of the inquiry into details of the drama and matters surrounding it. Therefore, their interests do not expand into the whole of Korean society.

Second, we show that this boom is what succeeded to the fashion of Hong Kong pop culture and American TV drama in the late 1980s and 1990s, therefore, it is not an entirely new phenomenon.